

医師逮捕に思う

アワセ第一医院 浜端 宏英

冤罪（えんざい）罪がないのに、疑われたり罰を受けたりすること。と辞書にある。福島県で産婦人科医師が逮捕され、7月号にその経過が書かれていたが、かつて私の周囲で起こった医師逮捕事件が冤罪ではなかったかと今でも時々思い出す。今回書いた内容は、実際に私が経験し、また知り得た情報から作り上げたもので、実際には事実と異なるかもしれない。どうかフィクションとして読んでいただきたい。

事件一

A医師：外科系の独身中年Dr.。いつも手術や回診で遅くまで黙々と仕事をこなしていた。写真の腕はプロ級で有名なカメラ雑誌に入選するほどであった。一度、入選写真を見たことがあった。それは確か題「八重岳の桜」で、暗闇に浮かぶ綺麗なピンクの1輪の桜が見事に写っていた。しかしその桜を支える枝は風にたなびき、背景に広がる暗闇は寒そうな小雨と風が見て取れた。鮮やかな桜と背景のコントラストが見事であった。

さて、その事件はある土曜日の深夜に起こった。大学生が交通事故を起こし中部病院に運ばれたのである。一緒に乗っていた彼女と思われる女性も怪我をし、手術場へ運ばれた。その女性は誰もが18～20歳に見えたのだが、事実は中学生であった。何故、女子中学生が深夜に大学生とドライブを・・・？そこから中学生を中心に時計の針は反転し、A医師が登場してきたのである。実はA医師はプロ級のカメラの腕前から、中部に自分のスタジオを所有し、そこで知り合った中学生の子供たちがいた。その土曜日の夜、たまたま彼女たちと出会い、早く帰り

なさいと自宅近くまで送り届けたのである。しかし、彼女たちは自宅に戻らず、また夜の街へと消え、そして大学生にナンパされた。

そしてその交通事故からだいぶたったある日、A医師は突然逮捕された。新聞をはじめとする報道は悲惨なものであった。最初からA医師をわいせつ極まりない者として扱い、悪意に満ちたものであった。スタジオに残された写真にも勝手に想像されたと思われるコメントが載り、事件への関与へのコメントは二の次であった。これでA医師は裁判の結果がどうであれ、社会から抹殺される運命となったのである。そして1年後、医師免許が取り上げられた。

当時、運が悪いことに医師免許が取り上げられる事件が多く、いわばそのような時代であった。A医師も免許を取り上げられたのだから、何らかの有罪判決が下りたのであろう。しかし本当にA医師は有罪に値するような悪いことをしたのであろうか？控訴も出来たのではないかと思われたが、そのような報道は伝えられなかった。おそらく過剰なまでのマスコミ報道に医師としての居場所がなくなったことを悟ったのではないかと考えている。

事件二

B医師：長年公立病院の管理職を務め、その温厚な人柄で慕われていた。その先生がある日突然逮捕された。A医師の逮捕から約1年後のことであった。理由は公立病院とは関係がない施設の理事長をしていたためである。金銭がらみの問題であったようだが、逮捕理由は、はっきりとしないものであった。1年前のA医師の時と同じように逮捕前には病院周辺が妙に静かに

なっと思ったら、ある朝突然の逮捕劇である。

テレビには逮捕されたB医師が手錠をはめられた姿で映し出されていた。しかしその姿は正々堂々と胸を張り、手錠も隠そうともしないものであった。奇妙なことに事件は衝撃的な報道が数日続いた後、急速にマスコミから登場しなくなり、B医師もいつの間にか釈放されていた。私は釈放後、B医師の自宅に伺ったことがある。その時、B医師は事件を詫びた後「何も悪いことをしていないから心配しないように」と話されたのを覚えている。何か釈然としないまま、時は過ぎ、そしてB医師は静かに職を辞した。

A先生との違いは医師免許を取り上げられなかった事である。それは何の罪にも問われなかったことを意味するものではないだろうか。しかし、マスコミの影響は絶大である。手錠をはめられたB医師の姿はそれだけで、取り返しのつかないものだったのである。

ある日突然逮捕しておきながら、有罪でなかった場合もやはり冤罪であるが、警察にすれば医師の有罪・無罪に関係なく逮捕することが重要であるらしい。それは県立大野病院の医師を逮捕した富岡署が、その直後に県警本部長賞を受賞していることから容易に考えられる。警察は医師を逮捕することでそのイメージアップを図っているのではないかと思いたくなるほどである。冤罪になった医師はどのようにして名誉を回復できるのでしょうか？非常に大切な事ですが、残念ながら良い知恵は浮かびません。

しかしどこかで名誉を回復する場があっても良いと思いました。私がA医師の事件も冤罪と考えている理由は、小松秀樹医師著の「医療崩壊」を読めば理解してもらえるであろう。この本は隠れたベストセラーになっているようですので、読まれた方も多いと思います。

この本によれば、警察は2002年に桶川ストーカー事件でその怠慢が非難されて以後、大半の市民の訴えに対し捜査するようになり、医療に関わる事件も捜査するようになったそうである。特に病院関係はターゲットになっているらしい。しかし著者は医療現場を捜査する警察関係者を非難してはいない。むしろ現場の警察関係者も被害者であるとの認識である。問題はもっと根が深いのである。著者は慈恵医大青戸病院事件にも言及している。著者が手に入れた資料から見えてくるこの事件は、報道されているものとあまりにも異なっているのが驚愕である。もしそれが真実なら現実には起こっていることはマスコミ・警察・司法で作り上げられたということになる。医療界で起こる事件、事故をトカゲの尻尾切りのように処理していたのでは、真実は見えてこないし、医療界の発展に寄与することなく、そして冤罪は限りなく増えるであろう。医療界の常識は警察・司法において何の説得力も持たないことを知るべきである。そして、この受難な時代を逆に生かすことが出来なければ医療界は崩壊してしまうということだと思われま。

終わり

原稿募集！

「発言席」のコーナー

会員の皆さまの御意見、主張を掲載いたします。奮ってご投稿下さい。